My Day in NIUE island

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 馬場, 優子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5666

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

南海遊録―ポリネシア ニウエ島[1]フィールドノート―（4）[2]

My Days in NIUE Island

馬　場　優　子

1995年5月6日（土）

ニュージーランドを離れ、再びニウエ島へ。日付変更線を東側へ越えるから今日出発して昨日着くことになり、1日分得する。しかし島から戻る時には1日損するからプラマイ・ゼロだ。いよいよ新聞もテレビもない生活が再び始まる。日本で大災害が発生しても伝わってこない生活。やはり地の果ての感がある。しかしそこにも人々が住んでいて結構楽しく生活しているのだから、その生活に浸るのも悪くない。全く異質の世界に入り込んでそこの生活をエンジョイすることは人生を豊かにしてくれるものだ。

だが、“未開”と文明の間を短期間に行き来し、それぞれの場に根づいた生活を築いてゆかねばならない――つまり単なる旅行者であることは許されない――状況の下で一方から他方へ移行する時（あるいは、した時）の身を削るような緊張感には相当の疲労感を免れないことを、オークランド大学脇の黄色い落ち葉が敷き詰められた坂道を上りながら実感した。

---

[1] ニウエ島は南太平洋上の南緯19度、西経169度に位置する孤島である。隆起サンゴ礁島であるため、島の周囲は海抜およそ28mから69mの切り立った断崖に囲まれている。島の面積は約260平方キロで13行政村落から成り、最大人口を擁する村アロフィに行政府が置かれている。本稿は1994年から1995年にかけて行ったフィールドワークの日誌の一部である。

[2]「南海遊録―ポリネシア　ニウエ島フィールドノートー（1）」は『コミュニケーション文化論集』第7号（2009.3.18発行）に、「同（2）」は同誌第8号（2010.3.20発行）に、「同（3）」は同誌第9号（2011.3.20発行）に掲載。

オークランドでは、週末は空港にほど近いニウエ人集住地区のニウエ人のお宅に1～2泊し、彼らの教会の礼拝や数々の催事にニウエ人の一人のような顔をして参加するという生活をしていた。同教会の構成員であるサモア人やクック諸島人から少し毛色の変わったニウエ人だと思われていたようだ。

週日は、大学図書館、人類学部ライブラリー、NZ＆太平洋資料センターで朝から晩までひたすら資料を調べ、読むという至福の日々を過ごした。大学、大学院時代にもこのぐらい勉強すればよかったと大いに反省した。

1995年5月7日（日）

4ヶ月ぶりに島に戻ってみると予想外の事態が起こっていて興味深い。小さな社会なので島中の人がお互いに顔見知りなのは言うまでもないが、とりわけ首相、閣僚、聖職者、ビジネスオーナー、それに各村の主立った人々は知らない人のいない、私のような外来者でも知っている「有名人」だ。その有名人のなかでも *palagi*（通常、白人を指すが外来者全般を指すこともある）の何人かがこの短期間に国外追放になったという。

アロフィのカトリック教会の神父は、ハイスクールの奨学生選考に際して縁者びいきがあることを教育省相手に公然と批判して、6月末をもって島外追放となった。レンタカー店とモテルを経営していたドイツ人夫婦は、夫が飲酒運転の廉で（通常は罰金刑なのに）運転免許停止となり、妻は保証人の偽署名をした容疑で捕まり、結局、夫妻は店を閉じて島を出て行ったという。その他にも国外追放された外来者がいるらしい。外来者は言動に注意しなければならないのは当然であろう。私も気をつけねば。

官公庁の人事も一変している。一つのポストに長期間就いているのはかなり有能か、あるいは代替者がいない、というような場合だ。一つのポストに変化があれば将棋の駒のように連鎖的に代替が起こる。

私にとって残念だったのは、島唯一のホテルである政府経営のニウエ・ホテルのマネージャー夫婦（ニュージーランド人）が現政府と意見が衝突して帰国してしまったことだ。ホテルに宿泊している間、私はたいてい彼らや他の単身宿泊者と夕食を共にしていたし、地元の家庭に宿泊している時は時々熱いシャワーを使わせてもらったものだ。代わりに彼らの20代の息子が新

＊文中の固有名詞に関して、公職にある人々以外の氏名は事柄の性格上、仮名としたことをお断りしておく。

マネージャーとしてやって来た。

島に戻って来てから再び日本のことを考えないように努める生活になった。日本で生活していた私が全く別個の存在のように思われる。地下鉄に乗り、大学で教壇に立っている私を思い浮かべると、ここにいてこういう生活をしている私とは何の関係もない別人のように思う。やはりアイデンティティーをどこかで切断しないとこういう全く異質の文化の中で生活していくのは無理なのか。

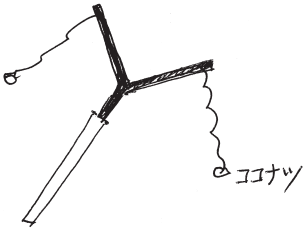
1995 年 5 月 8 日（月）

夕方、一人でアバセリ・ビーチの夕陽を見るために車を走らせた。この村のモテルに住んでいた昨秋は毎夕、このビーチで沈みゆく太陽を眺めたものだ。その時と同じ光景が――恐らく数百年前と変わらぬ光景だろう――今日も見られた。

5 時半頃、男達は一人また一人と浜にやって来てそれぞれのアウトリガー・カヌーのそばに坐ってじっと海を眺めている。その後、持って来たココナツに穴をあけてココナツ・ジュースを飲みほしてから中の果肉を餌用に小さく切る等、しばらく静かな時間を過ごす。6 時頃、それぞれのカヌーを水辺まで運び、静かに滑るようにこぎ出す。大かたはリーフの外へ出て 5、6 人あるいは 2、3 人でかたまって漁をするが、中には一人だけ離れてする者もいる。浜から見えるところで釣る者も、湾の突端を回って他村の領域近くまで行く者もいる。

7 時頃、男達はカヌーを軽快に操って一艘ずつ浜に戻って来る。リーフの切れ目を正しく通って。そして浜のそばに来るとゆっくり旋回したり水をくみ出したりする。一直線に浜めがけて戻って来てカヌーからすぐ降りることはない。7 時半頃、どのカヌーも陸に上がった。本日の収穫は多い者で 12, 3 匹、少ない者で 3 匹だった。このアウトリガー・カヌーでマグロなどの大型魚を捕る者もいるが、本日は *ulihega*（体長約 25 センチのサバの一種）ばかりだった。ふつうは 1 時間の漁で *ulihega* が 40～50 匹釣れるという者もいる。釣り具は二股の釣り棹に餌のココナツをつけたものである。浜辺で漁の成果を訊くと必ず分けてくれようとする。尋ねるということはその物への関心の強さを示すので少し分けてあげるのが礼儀だという。

アウトリガー・カヌー



釣り具

陸に上げたカヌーを各自所定の舟置き場に戻し、ココヤシの葉をかぶせて釣った魚を車に積む。妻が車で迎えに来ている者もおり、子ども達が浜で泳ぎながら父親が漁から帰るのを待っている場合もある。

1995 年 5 月 9 日（火）

夕食後、またアバセリ・ビーチに行く。若い女が 3 人、リーフの深みで泳いでいた。ヘレニとその従妹達だ。3 人ともよく肥えている。若い男の子がカヌーで沖へ出たり戻って来たりすると、その度にカヌーを捕まえて甲高い嬌声を上げたり笑ったりして騒いでいる。とても楽しそうだ。3 人ともショート・パンツ、タンクトップ、下着をしっかりと着込んで泳いでいる。これが彼女たちの水泳着なのだ。そして水から上がるとすぐに T シャツを着る。

女性が水泳をする時、肌を人に見せないよう衣服をきちんと着て、いわば重装備であらねばならないのはこの島の規則である。観光客や幼児は一般的な水着を着ることが許される。しかし島の女は許されない。9 歳の少女ですらショート・パンツに T シャツの重ね着で泳いでいる。先日、20 代のマラタが「今、泳いできたのよ」と言って歩いて来た時の姿といったら、T シャツを何枚も重ねて着て、黒い長ズボンをはいていた。普段はズボンなどはかないのに。

女達が水泳以外の時にも肌を露出しないかというとそうでもない。夜、寝る時は *lavalava*（腰布）一枚だし、ワンピースやブラウスはバストが見えそうな着方をしている。ボタンが取れていたり、はずしていたり…。老人でもボタンがはずれたり、取れたりしてバストが見えてしまう人をよく見かける。

この社会は決して一般的に女性の身体的な露出に関して厳しい文化とはいえないのだ。水泳着に関して厳しいのは、キリスト教の教化過程で受け入れさせられた倫理・道徳律の残滓であろう。

1995 年 5 月 11 日（木）

昨日からラジオ（島のラジオ放送、Radio Sunshine）で島の長老であったジョーゼフ・クラセア・ジャクソン氏の死が 10 分おきに報じられている。享年 89 歳。ハクプ村の出身だが長い間アロフィの病院（島唯一の病院、官営）に入院していた。彼は島で初めての本格的な大工で学校、病院等島の公共施設の建設に携わった。ハクプの、人の目を引く大変美しい石造りの家は彼が建てた自宅である。

彼の妻は現在、アロフィの病院に近い息子の家に住んでいる。昨晩、遺体はそこに運ばれ、親戚、友人、その他の島民たちが弔問に訪れた。

今朝 9 時過ぎに柩（木製、白っぽい木目調、上に幅広の黒色リボンが掛けてある）はハクプのエカレシア教会（英国国教会傘下の London Missionary Society 系。この島のキリスト教化はこの教会勢力により行われた）へ運ばれた。

午後 1 時に告別式開始。5 分前には全島から参列した人々で礼拝堂はあふれかえっていた。珍しく定刻に全村のエカレシア教会の牧師達が並んで入場。その後からジョーの子ども達、孫達が続き、4 人の若い男性親族が柩を担いで入場する。その後からジョーの妻が 2 人の娘に抱えられて入場した。

礼拝堂内正面の祭壇に柩は置かれ、礼拝が始まる。祈祷、讃美歌、それに息子達やハクプ出身の議員や長老など 6 人が故人を送る言葉を述べ、最後にかの讃美歌 312 番(「いつくしみ深き…」）を歌って告別式は終わった。実に簡素だ。献花もなく、礼拝堂や柩を花で飾ることもしない。会衆の服装はほとんど平服であった。

次に人々はジョーの造った美しい石造りの家に移る。早朝、庭の隅にブルドーザーで穴が掘られ、コンクリートで固めてあった。その穴の中に柩を入れ、牧師が祈祷する。柩の上を鉄板でおおい、釘で打ちつける。そしてその上からセメントを流し込んだ。

故人の娘が大きな声で反りかえって泣いていたが、セメントを流し込む時には一段と大きな声を張り上げた。妻も嗚咽している。セメントを流し込ん

埋葬

だ所にジョーの孫達が 3、4 個の花束を置いた。そしてそこに花で飾られた十字架を立て、倒れないようにその辺の石を拾って根元に置き、支えとした。告別式と埋葬はこれでおしまい。人々は三々五々家路に就いた。

ヨーロッパ人が来島する前は死者の遺体は海辺の洞窟等に置かれ、自然の風化にまかされる自然葬であったが、現在は地中に埋葬する。墓は各々の家の周辺か故人の帰属する親族集団の所有地に、聖職者の場合は教会堂の周辺に墓を造り埋葬する。

牧師の墓

高温多湿の熱帯では遺体が腐敗しやすいので死後早く埋葬したほうがよいのだが、この島では、正午までに死亡した場合はその日の内に、12時過ぎであれば翌日に埋葬するという慣行がある。暗くなると穴を掘るのに支障が出るからというが、死者の霊魂への恐れがより強い根拠のようだ。ただし、人の発した言葉の威力への信仰があるこの島では遺言を守る行動規範があり、遺言で埋葬時を指定された場合は慣習からはずれることも許される。

服喪期間はかつては10昼夜であったが現在は5昼夜に短縮された。拡大家族の面々が故人の家に集まり、遺族と寝食を共にする。この間は愉快な楽しい歌は歌わず、讃美歌を歌う。昔は妻や娘は長い髪を短く切り、男は髪や髭を切らずに伸ばし放題にした。現在50代男性のオジは、最愛の娘が婚前妊娠し、胎児の異常が生じて妊婦が死んだ時、狂乱し、村中の家々を破壊して回った。取り押さえられ牢獄に 2、3日収監された。正気を取り戻してから5年間、髭と髪を伸ばし放題にして哀悼の意を表したという。

喪が明けた後の日曜礼拝は特別だ。遺族は故人の名前で教会に献金し、礼拝後、大宴会を開催する。それは故人の遺族からコミュニティ全体へのお返しであり、誰でも参加できる盛大な宴会である。

埋葬後1年ぐらい経った頃に墓に墓石を建立するというヨーロッパ式が定着している。石はニュージーランドから取り寄せる。

ジョーは自分が造った石造りの家の中に埋葬してほしいと言ったが、家族も村の人々も認めなかった。双系制社会では一般にそうだが、数世代経つと墓を世話する者が不明瞭になり、誰の墓か分からなくなる。墓のみならず家屋も子孫の誰が住むようになるか分からない。村の人々はそのことを考えて屋内への埋葬を止めたという。死者の霊魂に対する恐怖も一つの理由であろう。島では屋内に埋葬することはない。

1995年5月12日（金）

今日からアロフィの官舎に住む30歳前後の夫婦、ネリとタナの家に居候を始めた。夫ネリは政府機関に安定的に雇用されているわけではないが、妻タナは行政の中枢機関に多くの人材を輩出している一族の出身だからだろうか、ニュージーランドの短大を出て帰島した後、いくつかの部署を経ながらも行政部門で継続的に雇用されている。この二人にとって官舎に住めることはまことにありがたいことだ。

それはこの社会の居住様式ともかかわっている。この島の人々は、結婚したら夫婦は夫方の親族集団の土地に住むという。つまり夫方居住制の社会であると考えている。しかしそれは規範にすぎない。家系図で遡っても、現実の人々の選択を見ても、夫方もしくは妻方をそれぞれの条件を見合わせながら選んでいる。結果として夫方居住を選択した夫婦が若干多いという程度だ。つまり現実には双処居住制とみなしてよい。夫方か妻方か、それぞれの夫婦が様々な条件を考慮して選ぶのである。「選べる」という点では自由度があり、夫方か妻方のどちらかに規定された社会に比べれば望ましく思われる。しかし“自由”さが必ずしも好ましい状態をつくりだすとは言えない。

ネリとタナ夫婦はハクプ村すなわち夫ネリの実家の親族集団の土地に家を建てるか、それとも妻タナの実家のあるアバセリ村に家を建てるか、なかなか決められないでいる。もちろん夫は夫方に、妻は妻方に定めたい。妻側の親族はアバセリを勧めるし夫方はハクプを勧め、孫達にはしばしば「ハクプとアバセリ、どっちが好き？」などとこっそり訊いている。若夫婦はどちらに定めるか決められないでいる。夫の実家の前の空き家に仮住まいしてみたり妻の母親が入院すると妻の実家に住まいの拠点を移してみたりして定住していない。

この社会は焼畑農耕すなわち移動農耕の社会であるから、元来、非定住の文化である。ヨーロッパ人によるキリスト教化に伴って、キリスト教布教の効率を上げるために内陸部ブッシュの焼畑耕作地帯を移動していた人々を沿岸部に集めて定住させた結果、現在では人々は沿岸部に村落を形成して自宅を設け、そこに定住している。しかし状況によっては非定住生活にも容易に適応できるのだ。

例えば子どもが一人いる若い非婚カップルがいる。この種のカップルは決して珍しくなく、時によってお互いを「妻（夫）」と言ったり「ガールフレンド（ボーイフレンド）」と言ったりしながらも周囲からは夫婦とみなされている。結婚式は一般に盛大で大量の食糧の消費を伴い、若いカップルの力だけでは挙行不可能なので、彼らの親達により物質的に準備が整えられて初めて行われる。そしてその挙式の一部として教会で牧師によって正式な結婚として認められるのである。その前段階でカップルが同居し子を生すのはごく自然のこととみなされている。もちろん正式な結婚にまでいたらないカップルも多い。

この若いカップルと子どもの３人家族はどこに住んでいるのかというと、夫婦の実家は異なる村にあり、その日の気分や都合次第で夫または妻の実家に泊まるという。衣類は両方に置いてあるから問題はない。そもそも着のみ着のままで寝食することをいとわない人々だから、その日ごとに泊まる場所を決めても不都合はないのだ。非定住生活は彼らの生活の一形式とみなしてよいだろう。

ネリとタナ夫妻はそれぞれの実家のある村のどちらに家を建てるかなかなか決断にいたらない。長女が小学校に入学するまでには決めたいと言っている。どちらかを選べるという自由度が彼らを数年、悩ませてきたのである。そういう状況であるから、当面、官舎に住まうということは夫婦双方の親族から距離を置いてしばらく問題解決を先延ばしすることができるから束の間ではあるが彼らの間に平穏が保たれることになる。

このような夫婦の住まう官舎に私は１週間ほど居候してから、再びハクプ村に入ることにした。

ここの人々はよく大事な物をなくす。今週はUSP（南太平洋大学）ニウエ分校のディレクターであるネリが郵便局に設置されたUSPの私書箱の鍵をなくしてしまった。そのためUSP気付となっている私宛の郵便物も届かない。彼らは屋内だろうが屋外だろうが、本人にとって大切な物（例えば銀行の小切手帳、鍵など）だろうが、他人からの借り物だろうが、所かまわず置きっぱなしにしたりポイっと投げ捨てたりする。以前、乗せてもらった車の中で鍵の束が床に落ちていたので拾って「これ、誰かの大事な物ではない？」と言って手渡したら、その人は受け取るや否や、窓の外にポイっと投げ捨てたものだ。

昨日、居候している家庭で、夫が妻に「これ大事な物だからとっておいて」と言って１枚の紙片を手渡した。妻は振り返って無言のまま受け取ったが、夫が向きを変えるや否や、ポイっとその紙片を夫の後ろ辺りに捨て、歩いて行ってしまった。もちろん彼は気付いていない。その紙片はやがて妻が掃除をする時にゴミと一緒に掃き出されるか、運が良ければ夫の目に留まって拾われるかだろう。私はそれの命運を追跡しなかった。私自身、その後、そのことをすっかり忘れてしまったのだ。私も皆さんのように良く言えば気にしない、悪く言えばおざなりになりつつある。尤も彼らは大切な物をなくすの

は日常茶飯事だが、だからと言って大騒ぎすることもない。

1995 年 5 月 13 日（土）

早朝、ハクプ村に住むネリの妹キリが仲良しのシラと彼女の赤い車でホット・シャワーを借りにやって来て、朝食まで食べて帰って行った。タナは別に不機嫌な顔もしない。こういう時に不満気な顔をするのはニウエ人として一人前ではない。タナだってハクプのネリの実家に行ったらおいしいものを黙ってさっさと食べる。お互い様なのだ。他の人の持っているものをねだったり、人の厚意を請い求めるのは親愛の情の表現である。そしてそれに応えるかどうかで相手の親愛の情を測るのであろう。

大人の子どもに対する態度を見ているとこの社会の子どもの二面的な行動様式に深くかかわっているように思われる。甘やかしているかと思うと子どもに落ち度もないのに怒鳴って叱りつけ、叱りつけたと思うと次の瞬間には可愛がっている。その落差は大きい。だから子どもはいつも親の顔色をうかがいながら行動する。シファやファネの、叱られないと見た時の他人に対する悪ぶりは甚だしい。一方でとても可愛らしい時もある。その裏表の差に驚く。Louis Becke の“My Native Servants”* に出てくるアバセリの少女はまさにニウエ的といえよう。ヨーロッパ人の偏見とのみ決めつけるべきではない。

1995 年 5 月 14 日（日）

5 月の第 2 日曜日は White Sunday である。この日は全島のエカレシア教会で女と子どもは白い服を着て礼拝に行くことになっている。尤も以前は白一色に厳しく統制されていたが、最近は若干緩和され、白色以外の色が入った服を着てくる者もいる。私は白い服を持って行かなかったのでベージュの服で間に合わせた。

この日、私はヴァイレレ家の人々と一緒にハクプの教会に行った。ハイスクール生以下の子ども達はほとんど白一色だった。女子は華美なドレスを着て髪飾りを付け、髪形も大人っぽく結って着飾っている。皆、新調の服だ。靴も白いものに揃えている。男子は白いシャツに黒長ズボン。黒いベストを

---

*Louis Becke 1897 *Wild Life in Southern Seas,* London, T. Fisher Unwin, pp. 88-104

ホワイト・サンデー

着ている子も多い。皆、フォーマルな装いである。

礼拝の途中の10時に子ども達は会堂の外に集まって隊列を組み入場。全員が壇上に並んで歌った。次に年齢集団ごとに出し物を披露した。5～7歳児、8～9歳児、10～11歳児、ハイスクール生と分かれて次々に壇上に上がり、一人ずつ聖書の一節を暗誦したり、寸劇に脚色されたものを演じたりする。年齢が上がるにつれて一人ひとりの暗誦部分が多くなるので完全に暗記していない子どもが増えてくる。もちろん完璧に憶えてくる子もいる。以前は3週間ぐらい前から猛練習して当日は完璧な出来栄えを披露したものだが、当節はずいぶん緩くなった、と50代のクラは言う。

この島の子ども達は幼い頃から大勢の村人の前で聖書を暗誦し、聖書の寸劇を演じ、また口上を述べることが課されているのだ。明瞭な大きな声で堂々と演じると大人達は低く大きな声で“*Tulou!*”と言って称賛する。声が小さかったり出来栄えが良くないと人々は何も言わない。誰のどの様な出来栄えにも平等に拍手を送る日本人とは大違いだ。

子ども達の出し物が終わると献金をしてこの日の礼拝は終了した。皆、家路を急ぎ、それぞれの家庭で昨日から準備しておいたウム料理を拡げ、宴会をする。この日、ヴァイレレ家で出た料理はタロイモ、鶏肉、*polo*（葉物野菜）、コーンビーフ、*takihi*（タロイモとパパイアをココナツ・クリームで煮た料理）、ソーセージ、*pitako*（バナナ、タピオカ、ココナツ・クリームで作ったプディング）、鳩、魚、オレンジジュース、アイスクリーム、チョコレートケーキ、パイ、ジェリー2種類という豪華版であった。

満腹になると皆、居間でそのままごろ寝のお昼寝タイムへ。村全体が非常

に静かな一時だ。何の音も聞こえない。子ども達もお昼寝しているのだろう。犬と猫のみが食べ物を狙ってうろついている。お嫁さんも義父母の前でごろ寝している。静かな、平和な一時だ。

夜、ネリ一家と共にアロフィに帰る。家に入るや否や、ネリは3歳の娘シファを叩き、厳重に叱責している。車の中で一緒に乗って帰って来た従姉(15、6歳）に対してシファは押したり意地悪をしたりした。シファは両親も一緒だし自分の家の車である。その従姉はたった一人である。年少であるにもかかわらず、シファは大いに意を強くしたのだろう。ネリは極めて厳しく、威厳を正して、してはならないことをしたと叱っている。大声は出さず、静かに、しかし怖い顔をして叱責するので、シファはネリが一言二言発しただけでみるみる目に涙を浮かべ、ヘビに威すくまれたカエルのように身動きもせず声を殺して泣き始めた。それでもネリはうちわで叩く。シファは逃げない。その場から動けなくなったかのように父親を見上げて泣いている。父親の叱責は実に効果的だ。

一般に母親は頻繁に叱るが、子どもが「ごめんなさい。もう金輪際しません」というような状況にはならない。母親の子どもに対する態度で特徴的なことは、甘やかし可愛がるかと思うと次の瞬間には喚き、どなって叱りつけることだ。その差は激しくまた一貫性がない。母親の気分に任せて可愛がったり怒ったりする態度は父親の冷静で厳格な叱責によって均衡がとれているのであろう。

1995年5月15日（月）

タナの親戚筋のポラ（4歳、女）の誕生日パーティに招かれ、ネリ・タナ一家と出掛ける。ポラの父親はオバに養出されたタナの実弟イキ、母親はタナの兄嫁のイトコである。集まったのは本人の父母のほか、父方のオジ、オバ達とイトコ達、母方のオジ、オバ達とイトコ達、それに両側の祖父母とそのキョーダイ達のうち島にいる者、それに私自身で総計22名であった。ポラの父親はニウエ唯一の銀行であるW銀行ニウエ支店の経理、母親は農林局の広報担当であり、給与生活者の少ないこの島では相当恵まれた部類に入る。

子どもの誕生パーティですらスピーチが多い。当の子どもの父親から始め、出席した成人男子のうち4人（父、父の実兄、母方祖父、母方祖父の姉妹の

夫）がスピーチならびにお祈りを行った。締めくくりの祈祷をしたのは子どもの母方祖父で、子どもの直系の祖父であり、かつ集まった人の中で世代の最も上位の人物だ。彼がお祈りのみならずギターを弾いて歌ったりして、この集まりの求心力を示していた。タナの妹のロペの息子ナシが嘔吐した時、この老人はナシの頭に手を当てて祈った。長い時間そうしていたが、幼いナシは神妙にしていた。母親のロペも同様、頭を垂れて聞いていた。伝統的な宗教とキリスト教の習合がこのような形で残っているのだ。

1995 年 5 月 16 日（火）

早朝 5 時頃、まだ皆が寝静まっている時間に誰かがそっと入って来た。居間で一人で勝手にテレビをみている。誰かと思ったら病院の看護婦をしているアバセリのタナの従妹だった。出勤前に立ち寄ってビデオをみていたのだ。

ビデオは、最近、オークランドで行われたリネの双子の妹マリルーの 21 歳の誕生祝いを撮影したものだった。彼女は昨年、ハイスクールを中退してクラとメレの里子になっていた。その頃はガリガリに痩せていたが、このビデオでは丸々とした少女に写っている。彼女は悪性腫瘍のためオークランドに行って治療を受けている。それにしても豪勢な誕生パーティだ。私も一緒にビデオをみた。

従妹は 6 時半頃、職場に向かった。勝手に入って来て断りなしにテレビをみてゆくのは別に異常なことではないらしい。

アロフィに滞在している間に公的文書資料を集めておこうと、このところ法務局に毎日通って古くからの家系図や人口関係（出生、死亡、婚姻、養取等）資料および土地法廷の議事録、すなわち archives と格闘している。しかしここでは公文書が整理されきちんと保管されているとは言い難い。土地法廷の記録文書の一部の巻冊が養取記録のそれに途中から変わっていることもある。古い記録文書は端が傷んで崩れていたり、手書きの文字のインクが消えていたり、綴じ目がほつれて頁がばらけていたりして、コピーするのも容易ではない。なかには紛失した巻冊もある。誰かが使った後、元の場所に戻しておかないから別の部屋に紛れ込んでしまうのだ。私はそういう資料の所在探しもやっている。休憩時間もとらずに資料を探したり、写したり、コピーの不鮮明な部分を補ったりしている。人間は記録を残す為に存在するのでは

ないから記録文書を大切に扱わない人々を一方的に非難するわけにはいかない。公文書の重要性に対する真の認識は社会に余裕が生じて初めて高まるのであろうか。

この島でも archives 保存意識がないわけではない。その証拠に首都アロフィの公共図書館の隣室に archives 室が置かれている。しかしここを管理しているダミアは名刺にこそ“assistant archivist”と書いているが archivist の資格を持っているわけではない。何も集めていないと本人も言う。部屋と机、椅子があるだけだ。その担当の彼女もめったに出勤していない。部屋には古い雑誌や新聞の入ったダンボールがいくつか乱雑に置いてあり、誰も整理しないままだ。

行政機関の勤務時間は朝７時半から午後３時半と定められている。しかしほとんどのニウエ人は８時頃に出勤してくる。７時半少し過ぎに来るのは受付のシドニーぐらいなものだ。そして勤務時間中は仕事時間と休憩時間の区別がないような過ごし方をしている。あっちこっちでブラブラと油を売っていて、指定の机、椅子に落ち着いていることが少ない。そのそばで私が必死に作業をしているので皆、あきれ顔をしながら「そんなにハードに仕事をしてはいけない」と注意してくる。彼らは３時頃になると帰り支度を始める。もう帰宅する気分になっているのだ。３時半ギリギリまで仕事をしている私を迷惑そうに見ている。そして私が帰り支度を始めると“待ってました”という表情をする。

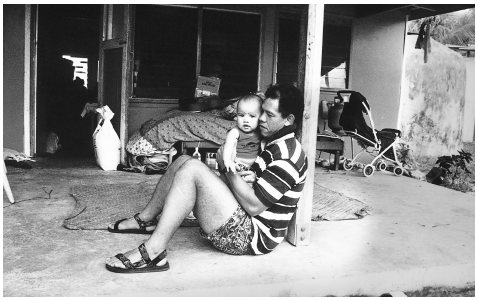
法務局や裁判所がある Huanaki の一画に Snack ＆ Bar がある。妻は中年のニウエ人で夫は年配の *palagi* だ。ほとんど妻がこの店の切り盛りをしている。ここのハンバーガーはいける。トマト、キャベツ、時には *luku*（シダの一種。若葉は食用野菜）も挟んで NZ＄３。これに玉子とチーズが付くと NZ＄３.５。営業時間は朝８時半頃から。「閉店時間は？」と訊くと“It all depends.”ときた。お客が来れば開けているが来なければさっさと閉めて帰ってしまう。この“It all depends.”はこの社会全般の特徴をよく表している。何事もその時次第、状況次第、気分次第なのだ。

未婚の若い母親キリのところに相変わらず村の若い男ミシガンが入り浸っ

ている。キリは、以前は実家とは通りを挟んだ向かいの空き家に住んでいたが、未婚のまま娘シアヒが生まれてから実家に戻り、両親と同居するようになった。しかし最近再び向いの空き家に住むようになった。そこは２部屋あり、どちらも衣服その他の物が散乱している。彼女は *lavalava*（腰布）に模様を染色して売り物にするのを仕事にしているというのだが、寝室に置いてある２個の染料用バケツを見ると仕事をしている気配は見えない。気楽なものだ。

ミシガンとキリは終日、ベッドに寝そべってしゃべっている。赤ん坊のシアヒはそばで寝ていたり、誰かが連れていって世話をしたりしている。キリは毎週木曜日夜にアバセリの IS レストランで行われるダンス・パーティへ、そして土曜日の夜はアロフィの S レストランのダンス・パーティへ出かける。赤ん坊のシアヒは母親かそのイトコの妻パルアに預けて。土曜日は夜８時頃に出かけ、午前１時頃に御帰館となる。従って翌日曜日の午前中は眠っているから教会へはめったに行かない。たまに行く時には「シアヒの歩行練習のために教会へ行く」などと言っている。

母親が幼い子どもの面倒をみなくても誰かが手を出して世話をする。昨日、キリの父方従姉レニが、シアヒのおむつが汚れているのに気付いて取り替えてあげようと寝かせた途端、ピューっと新しいおむつが飛んできてレニの顔にぶつかった。キリが投げてよこしたのだ。ぶつけられたレニも別に何とも言わず、当たり前の顔をしておむつを替えていた。



老若男女みな幼い子どもが好き

1995 年 5 月 17 日（水）

島の誰もが乳幼児を抱いたり、あやしたり、預かったりしたがる。特に若い男女、子ども、女達は幼い子ども（大体 2 歳以下）を見ると抱きたがり、抱かせてもらうと喜んで物を借りたかのように連れていって見せびらかす。そしてまた貸しが際限なく続く。ごく稀に *palagi* を怖がる子もいるがほとんどの子は “*Hau !*”（「さぁ、いらっしゃい！」）と言われれば誰の手にも渡ってゆく。そして眠くなれば誰の腕の中だろうと構わず眠る。親はいつも自分の子どもがどこでどうしているかを気にかけることはない。どこかで誰かがみているだろうと思っている。

先日、タマコトンガ村の祭の時、ハクプ村のマヒネ（女　30 代）の姪がタマコトンガの村人の生後 7 カ月ぐらいの赤ん坊を借りてきた。嬉しそうに、得意そうに「借りてきたわよ！」と言って見せびらかす。周りの女達が皆のぞき込んで抱かせてほしがった。だから何人もの手に渡るが、赤ん坊は泣いたり、いやがったりすることはない。マヒネも早速借りて嬉しそうに抱いているうちに姪がふっと姿を消してしまった。赤ん坊は見知らぬ人に初めて抱かれても泣き喚いたりなぞしない。不安気もなく抱かれている。そして周りの物で遊び始めた。しばらくしてこの赤ん坊は眠いのかぐずり始めた。マヒネに「この子は誰の子か分かるの？」と訊くと、「姪の友達のお母さんだから心配ない」と気にもせずに平然とあやしている。狭い社会だから必ず分かるわけで、心配はないのだ。ごく自然に自分の子を扱う態度でその誰の子か分からない赤ん坊の世話をしていた。

赤ん坊は誰の手にも渡るが、人々も誰の赤ん坊でもかまわずに抱きたがるものだ。泣き出したら誰かがあやせばよい。どうしても泣き止まないと親のところに連れてゆくが、それ以外は預かった人が責任を持って世話をする。今、赤ん坊を手にしている人に全責任が一時的に移って来ているのだ。だから誰かが赤ん坊を連れて行ったら、その人に生後 2 か月の赤ん坊であろうとすっかり任せて親はさっさと姿を消してしまう。親が気になって自分の子を見に来ることもない。まったく任せっきりだ。そして親は親で他の人の赤ん坊を抱いていたりする。自分の子も他人の子も “みんなの子” なのだ。

ヴァイレレ家の長女である未婚の母キリの家にも、朝と言わず夜と言わず絶え間なく小学生から 20 代までの若い男女がやってきて娘のシアヒを抱いたり、頬擦りしたり、抱いて外に出たり、遊んだりしている。

1995年5月19日（金）

ニウエ・ホテルのバーにはたいてい男達が午後2時か3時頃から集まり始め、夜の10時頃まで飲んで騒いでいる。乱闘騒ぎを起こして検挙者が出ることもある。すっかり酔った後、自分で車を運転して自分の村に帰らねばならないのだから事故も起こり易い。政府がいくら飲酒運転禁止を謳っても、政府が島で唯一の公認バーを経営し、飲酒の源をつくっているのだから効き目がない。このバーには国会議員の常連も数々いて、昼間から来て夜遅くまで飲んでゆく。男達の飲酒がこの島の重大な問題となりつつあるのを感じる。

さらに、ホテルの新マネージャーはアルコール中毒気味で時々、昼間から酒臭さが漂ってくるし、目がいつも赤く濁っている。彼の両親である前マネージャーはホテル経営についてかなり厳しいガイドラインをもってやっていたのだが島民の期待と齟齬をきたしたらしい。観光客の減少もあり経営不振となって経営方針を大きく変更せざるを得なくなった。しかし夫妻はそれを受け入れられずニュージーランドに帰ってしまった。後任のマネージャーとなってやって来た息子はホテル・バーの経営に力を入れ始め、バーのカウンターの中でバーテンダーをしている時間が圧倒的に長い。また土曜日の夜はダンス・パーティを開催するという方針を取り入れた。この頃からホテルの喧騒が強まったようだ。ダンス・パーティは夜8時半ごろから12時頃まで続く。毎晩、バーからは人々の哄笑や怒声が鳴り響く。以前のような静かなニウエ・ホテルではなくなってしまった。

1995年5月21日（日）

10歳前後の少年・少女達はアヤトリが大好きだ。いつも毛糸の紐を首に下げている。礼拝の最中でも熱中していることさえある。真横を向いて堂々と友達やきょうだいとやっていることもあるが、騒ぎさえしなければ大人は叱りつけない。彼らがよく作るのは2個のダイヤモンド、3個のダイヤモンド、ゴム、舟等だ。私が教えた箒と川はあっという間に拡がった。

1995年5月22日（月）

最近、夕方になるとハクプ村の8歳の少女シアレがよくホテル・バーにいる。両親が仕事帰りに飲んでゆくので待って一緒に帰るのだ。今日もシアレがバーのラウンジで一人テレビをみている。父トルと母ヘカリは二人でアロ

フィのコマーシャル・センターの１店舗を借りて始めたSnack & Barが大当たり。５人の子どもを母方イトコあるいは祖父母やそのきょうだいに養子あるいは里子に出し、毎朝７時頃から午後２時頃まで商売に精を出す。その後、ホテルに来て飲み始め、夜遅くまで娘シアレにはロビーでテレビをみさせて飲んでいる。

シアレは生後すぐにニュージーランド在住の父方祖母フィシの養女となり、そこで育った。時々、フィシやその姉ヒネがニウエに里帰りする時に一緒に来て、再びニュージーランドに戻る。しかし昨年、祖母の姉が島に来る時に一緒に来て、もう帰らない、島で父母と一緒に暮らす、と言い出した。そのことをシアレは電話で祖母に伝えたが、その時、祖母フィシは、よろしい、しかし学校が終わった後、ハクプの家ではなく、アロフィの店でスクール・バスを降り、父母の仕事が終わるのを待って父母と一緒にハクプへ帰りなさい、と言った。シアレはその言いつけを守っているのだ。フィシはこの時、シアレ以外のきょうだい達を里子にしている母方親族なかでも祖母ペタがシアレを差別的に扱うのではないかと心配してそのような指示をしたのだ。

母ヘカリがシアレの成育環境を考えて少なくともヘカリだけは閉店後すぐにハクプの家に帰ってあげればよいのに、と考えるのは文化的偏見だ。この社会では親が子のために心身を犠牲にするような行動も規範もみられない。むしろ子どもは親の為に存在するのである。子どもに危険がなく、最低限の食べ物が保証される環境に置かれれば親がそばにいる必要はない。子どものそばに実親がいつもいるべきとか、親の態度や行動が子どもの幸・不幸を決めるから親がしっかりと子どもを育てなければならない、などとは考えない。

子どもが母親に属しているとか、子の人格と母親のそれが半ば融合しているというような考えはなく、赤ん坊であっても独自の人格を持った、母親とは別個の存在と見なしている。自分の子どもが誰かに何かを（して）もらった時に、子に代わってお礼を言う親はいない。子が他人に対して非礼を行った時――例えば、人前を通る時に“*Tulou*”（Excuse　me）と言わないなど――子に代わって謝ったりする親はいない。子どもが礼儀にもとる行為をすると子に代わって、あるいは子と共に詫びるのではなく、子どもに対してその非礼を厳しく叱りつける。

従って親子の間のしがらみは強くない。子どもは親に対して特殊な強い感

情を抱いているようには見えない。村内に住んでいる、しかし大変に年老いて成人の社会的活動から退き、いわば隠遁しているような老齢女性が、子どもや孫が周辺に大勢住んでいるにもかかわらず日常生活ではほとんど放っておかれ、催事にも誘われることがない（食事は子どもの誰かが与えているが）。また久しぶりに島に帰って来たにもかかわらず親に会いに行くこともない子の例を散見するが、こういう一見すると冷酷にも見える子の行動もこの親子関係の下ではごく自然なことのように思われる。

1995 年 5 月 23 日（火）

ヴァイレレ家の長女キリはスナック菓子を買ってきて実家の居間で食べると空き袋をその場にポイ、出入り口の椅子に坐って食べればそこにポイ。その袋が風に吹かれて道に出ていったり、庭草の上に落ちていたりする。食べた後の袋を始末するのを見たことがない。ゴミ箱というものが家の内にも外にもないことも一因だろう。

豚の餌になる残飯を入れるポリバケツが台所の隅に置いてある。しかしたいていは食事で使った皿の一つが残飯用の生ゴミ入れになり、山盛りになるとそのバケツに入れられる。その他、紙など豚の餌にならないゴミは台所の床に雑然と捨ててある。

戸外でも缶や袋のポイ捨てはごく当たり前だ。ネリなどはビールを飲んだ後、どこにいてもその空き缶をポーンと空高く放りあげて気分よさそうにしている。家の外にも内にもゴミ箱がないということは必要がないということであり、ゴミはその辺りにおけばよいということだ。

ポイ捨ては葉や枝など自然物を使っていた時代の名残であろう。彼らは今でも常にブッシュナイフを携行し、植物の葉や枝を切り落として皿やフォークやバッグを即席に作って利用する。自然物は使った後、その辺りに捨てておいても風化して土となる。あるいはココヤシや魚、果物などは人間が食べた後、残骸をそのあたりに放置しておけば犬、猫、鶏その他の小動物が食べてくれる。しかしプラスチックや缶は異物として残る。彼らは非自然物を使うようになってもなおポイ捨ての風習を改めない。

1995 年 5 月 24 日（水）

昨日の夕方、ハクプ村に移動することになっていた。しかしヴァンで私の

大荷物を運んでくれることになっていたネリが来なかった。夜遅く、宿泊する予定の家の主婦メレがなかなか来ないと苛立って私に電話してきた。今朝一番にUSPに電話して、ネリが出勤してきたらすぐに私に電話をくれるよう、秘書に頼んだ。8時、ネリから電話がかかってきた。昨日は自転車の修理をしていたら日が暮れたので寝てしまった、という。厚意でやってもらうことだからこちらからあまり非難する筋合いのものではない。それに約束を忘れるというここの人達のごく日常的な行動パターンにはこちらも慣れている。今日こそ確実に来てもらうことと、メレに電話をして昨日、移動できなかった理由を説明しておいてくれるよう頼んだ。夕方5時過ぎにネリがピックアップしてくれた。

ハクプでは今夕、レヘタ家で、ニュージーランドで牧師の資格を取って帰島したハレとかの地で知り合ったトケラウ島出身の女性の婚約式が6時から行われる。ヴァイレレ家は招待されているが、クラは行かないというのでメレと私とで出かけた。メレの従弟の妻パルアがヴァンで迎えに来て一緒に行く。同村内で徒歩2〜3分の距離だが車を使うのだ。キリも赤ん坊のシアヒを伴ってやって来た。正式に招待されていない若者達が多数、家の外でたむろしている。キリはその中へ入って行った。

この季節、6時といえばすでに真っ暗だ。レヘタ家の庭の暗がりにはすでに人がたくさん集まっている。女達は中心にあるベンチに腰かけ、男達は端の数台の車のところにたむろしている。子ども達は庭のブランコにすずなりになっている。いつもそうだ。人が大勢集まると、女達、男達、子ども達、若者達に分かれて群がっている。また人が集まると必ず犬達も集まって来る。

式の中心舞台は居間である。ここに本人達と親戚の面々が坐っている。6時、牧師達と親戚の男達が車置き場を離れて家の中へ入ってきて、式は始まった。スピーチ、祈り、スピーチ、祈り…これが延々と続く。村人達が搬入した料理はすでにテーブルの上に並べてある。スピーチと祈りの間中、皆、空腹に耐えて食事を待っている。いつものように、長い挨拶の間、料理を前にして飢えの状態に耐える彼ら。子ども達も我慢している。そして主催者が「どうぞお食事を」と一言発するや否や、バナナの葉で作った皿に皆の手がさっと伸び、料理のテーブルに群がって先を競って取ってゆく。食べきれないほど取るのが当たり前だ。

この日は魚が多かった。ほとんどが *ulihega* で、1匹丸のままあるいはぶつ切りにして蒸し焼きにしてある。皆、フォークなど使わず、手づかみで食べている。食べ物の分配が済むとそこで食べる人もいるが、食べずに分け前をもらってさっさと帰る人も多い。先に食事タイムに入るとスピーチを聴くことなく帰る人も多そうだ。招待状は一応出すが、それ以外の人が来ても構わない。村人達への大盤振舞といったところだろう。

しかし今日は料理に関して不評だった。不足気味だったのだ。たくさん欲する人達が満足するまで取ってもなお人々に十分に行き渡るぐらい余裕のある分量が望ましい。本日は貪欲さん達が取った後はタロイモと鶏肉ばかりになってしまった。人々が家に持って帰って全て食べ尽くすかと言うとそうでもなく、あらかた食べて残りは生ゴミになる。食べ物を前にして重要なことは“満腹になる”ことばかりでなく存分に食べられるという満足感なのである。

ヴァイレレ家でも皆で持ち帰ったものを夕食にする。その後、私は10時半ごろまでクラとしゃべっていた。メレはずっと居間で私達の話を聞きながらパンダヌスの葉の編み物をしている。この編み物をしている時のメレはきわめて勤勉だ。指の動きを止めることなく長時間編み続けている。そのそばで養女のファネ（10歳）はテレビをみながら眠そうだ。そして3人とも居間で着の身着のままで眠ってしまった。

1995年5月25日（木）

明け方、目を覚ますと遠くの方から波の音が聞こえてきた。外はまだ真っ暗だ。波の音を聞きながら再び眠りにつく。

屋根、芝生、石灰岩の舗装道路、ココヤシの葉等をたたく雨音で再び目が覚めた。初めはポツリポツリ…その音がやや大きくなったかと思うと、急に大地を叩きつけるような音になった。これがいつまで続くのだろうか。6時に起きた時には少し弱まっていたがまだ降り続いている。雨雲が島の真上で止まってしまったのだろうか。これでもサイクロンではない、ただの *uha*（雨）だと皆は言う。

雨と共に暖かさが戻ってきた。とても蒸し暑い。この大雨の下でヴァイレレ家の長女で未婚の母キリ（24歳）と近所のシラ（女　20歳）それに男子ハイスクール生のランギは相撲をしている。丸々とした女2人と痩せた男の子。キリは何回やってもランギに負ける。上背が足りないから寄り切りがで

きないのだ。シラとランギはいい勝負である。この３人は次にバレーボールを始めた。雨にぬれるのが気持ち良いと言わんばかりに、奇声を上げながらずぶぬれの３人は楽しそうに遊んでいる。

朝食後の皿洗いと家の中の掃除は私が引き受ける。相変わらず一回に掃き出すゴミの量は甚だ多い。汚れた床を拭くには、床にゴミまみれ、泥まみれになって転がっている誰かのシャツを使う。皿洗いを終えると爪が真っ黒になっていた。泥水のような洗剤入りの水で洗うからだ。彼らはそれをすすがずに布巾で拭くだけである。私はさすがにそれはできない。流し水ですすいでラックに置く。私は水を使い過ぎると思われているだろう。

ハクプ村も今やあまり静かではない。モータリゼーションが進行し、自家用車を持つ家が増えた。一旦、車を持つと、十数メートル離れた場所に行くにも車を使う。こうした車ばかりでなくトラクター、トラック等大型車も走り回っている。前回滞在した時は風の強いハクプに風力発電用の発電機を設置する工事や、オーストラリアの援助による旧トアセア学校校庭のラグビー場化工事等の騒音が鳴り響いていた。今回は工事の音はないが、村内の小商店にコンテナを運んでくる大型車や村人が日常使っている乗用車やヴァン、バイク、小型トラック等の音が騒がしい。しかし村の中に最も騒音を放っているのはラジオとラジカセだ。どの家もボリュームを最大限に上げて隣近所に鳴り響かせている。従って村の中を歩いていると、あちらからもこちらからもポリネシアン音楽、ラグビーやアメリカズ・カップ（国際ヨットレース）の試合中継、（議会開催中は）国会中継が聞こえてくる。

考えてみると、村が静かである――波の音とココヤシの葉の鳴る音しか聞こえない――のは村が沈滞し発展のない状態とも言える。トラクターや大型トラックが行き交う騒音は発展への鎚音であると考えることにしよう。

ここでは何事も早い者勝ちだ。誰かが食べ物を手に入れた、あるいは作ったとする。その場にいる者は皆、その食べ物を食べることができる。“ふるまわれる”というよりも自分で取って食べることができるのだ。その場にいない者には一家の夫であろうが誰であろうが、残しておいてあげるということはまずない。その場にいなかった者は皆が満腹して食べ残したものにあり

つくだけだ。残り物がなかったら、空腹であれば自分で調達して空腹を癒すのである。

やや珍しい食べ物に関しては主婦が分配権を行使することがある。この日、夕食の副食用にメレは到来物のトビウオをココナツ・ジュースで煮た。とてもおいしかった。主食はタロイモだ。彼らは食事には何はなくともまずタロをゆでる。私達がとりあえずご飯を炊くのと同じである。トビウオは全て半切して煮てある。その分配をこの家の主婦であるメレが慎重に行う。夫クラ、メレ、客人（居候だが）の私のお皿にはそれぞれ２個ずつ１本分の魚がのせられた。養女ファネのお皿には魚の頭が付いた半切れをのせ、ココナツ・ジュースをかけただけだ。ファネは何も言わずいつものように薄笑いを浮かべている。育ち盛りの彼女は空腹のはずだ。空腹を満たすために彼女はタロイモをたくさん取って食べている。タロは十分にあるからいくら取っても叱られない。魚はもうないのかと思ったら、メレは自分の分をさっさと食べ終えると魚のお代わりをしている。２本分食べた。驚いたことに翌朝、またメレはひとりでトビウオを食べていた。まだ残っていたのだ。それを夫にも与えず一人占めにしていたわけだ。

このお母さん、おいしいもの、珍しいものは人一倍食べないと気が済まないらしく、時々、独り占めしている。ヤシガニが珍しく到来した時も朝からゆでて一人で食べていた。誰にも「食べる？」と勧めない。一人で黙々と食べていた。夫がついに「俺にも少しくれよ」と言うと、しぶしぶあげていた。人一倍摂取するからだろうか、とても肥えている。食物の分配権を握っているから太るのも当然だろう。そういえば成人女性はほとんど太っている。成人男性には太っている者やスリムな者もいるが、中間ぐらいの筋肉質な者が圧倒的に多い。ここの成人女性達の太り方は食物の分配権と関係があるのかもしれない。

今回ヴァイレレ家に戻ってきて気づいた、前回と異なる点の一つは裏口の戸を開け放っておかないことだ。もちろん鍵はないからかけないが戸は閉めてある。表口の戸は誰かが在宅している時は開け放ってあり、全員不在になる時には閉めてゆく――これは以前と同じである。

裏の戸を閉めるのは犬が入ってくるのを防ぐ為であるという。以前、この

家には「女みたいな男」という名のうす汚いけれど人なつこい白い飼い犬がいて、家の中に入ってきては叱られていた。しかし他家の犬は入ってこなかった。あの白犬は、余りにも他人や車を追いかけて困るので銃殺したという。従って現在この家に飼い犬はいない。この家に、すなわちこのテリトリーに犬がいないので他家の犬が入ってくる。特に隣家の大型の白犬が頻繁にのぞきに来たり、家の中に入ろうとしたりする。屋外に置いてあった鶏用の輸入飼料の袋を食いちぎり、穴をあけて食べていたこともある。この家に飼い犬がいれば、他の家の犬は他犬のテリトリーを侵すわけにはいかないから入ってこないが、飼い犬がいない家は犬の世界では領主がいない土地であるから食べ物を求めて堂々と入ってゆく、と人々は解釈している。まさに彼ら人間の土地に対する占有権観念をもって犬の世界が解釈されているのだ。

とすると、犬に入ってきてほしくない人々は戸を閉めるか犬を飼うかだ。それで犬を飼っている家が多いのだ。全く可愛がりもせず、そばに来るとすぐに追い払うばかりの犬を何故飼うのかと思っていた。餌を与えることもなく、生ゴミを漁って生きている犬を家のそばに放置しておくだけでその“土地の主”、すなわち番犬になるのだ。

1995 年 5 月 26 日（金）

島の人口が多かった頃は各村に小学校が設置されていたが、人口の島外流出が大規模になって後、各村の小学校は閉校され、アロフィの東方にそれぞれ 6 年制の小学校とハイスクールを設置して島の教育を一元化した。その為、政府はスクール・バスを運行して各村の子ども達をピックアップしている。小学校は朝 8 時始業、ハイスクールは 9 時始業である。それに合わせてハクプ村にはそれぞれ 7 時と 8 時 15 分にバスは来る。村の 2、3 か所でバスは子ども達を拾ってくれるが、雨の日は各自の家の軒下で待っているとバスが各戸で止まってくれる。

ヴァイレレ家の小 6 の養女ファネはこの日、バスに乗り遅れた。ファネは養母メレに叱られると思ったのか、養家に帰らず自分の実家に向かった。それをメレは目ざとく見つけた。それはメレと私が一緒に朝食をとっている最中で、急にメレの表情が険しくなったかと思うと、食卓について坐ったまま、口の中に食べ物が入っていてしかも窓も少ししか開いていないにもかかわらず、屋外の遠くに向かって「ファネーッ！」と怒鳴ったものである。もちろ

んファネには聞こえず、また見られているとも知らずに彼女は実家へ向かった。メレはすぐにファネの実母に電話を入れた。最初、ファネは来ていない、と実母は言ったらしい。メレの怒りに火がついた。電話口で大声で怒鳴っている。それでもメレの怒りは治まらない。その一件を会う人ごとにしゃべって怒りを発散させている。ファネは結局は実父に車で送ってもらったらしいが、乗り遅れたなら養家に帰ってくるべきであり、そうすればこちらの誰かが車で学校まで送るのに、というのがメレの主張である。メレの娘のキリも母親同様に怒っていた。ファネにとっては養子の置かれた立場を学ぶ良い機会になったと思われる。

出稼ぎ、病気治療、教育等の為にニュージーランドへ渡って行った人の家は空き家となる。その空き家が島のそこここにあるが、居住者がいる家との区別は実は簡単ではない。カーテンが掛かっているかどうかは決め手にならない。窓ガラスが壊れたままになっていることも、部屋の中に物がたくさん置いてあるかどうかも判断基準にならない。カーテンのない、窓ガラスが壊れていて、中には家具の一つも見えないような家でも空き家ではないことが少なからずある。逆に、中に衣類や靴その他が散乱していても空き家のことがある。

その種の空き家の一つにキリと海岸まで行った帰りに立ち寄った。キリの母方オバの家である。3室ある家で、長期間誰も住んでいないのに本や書類が散乱している。寝室らしい部屋には衣類、靴、靴下が脱ぎ散らかしてある。まだ使えそうな物もたくさんある。キリは本を3冊、勝手に持ち出した。

「マンゴーを採っていこう」キリは言う。この辺りの土地はキリの母の *magafaoa*（親族集団）の土地だからキリは果実を採る権利を持つ。しかし彼女はマンゴーの木を一瞬見た途端、「高いところにしか実はついていない」という。すごく目が良い。

帰り道、今度は母メレのイトコの家に寄り、バナナをもらって行こう、と言う。声を掛けて軒先に吊るしてあるバナナの房から二つもぎ取って家に帰った。キリはこのパルアの家のそばを通るたびにバナナを数本もらっていこうとする。パルアは断らない。バナナならキリの家のブッシュにいくらでも生っているのに、人からもらおうとする。

人にものをねだるのは当たり前の行為である。単に貪欲さからではない。

一種の礼儀と考えてよい。sharing（分かち合い）を原則とする社会では“人のものは自分のもの、自分のものは人のもの”だ。キリと私がバナナをもらった話をするとメレは満足そうに「それでよし」という表情をしてうなずいた。パルアが親族として正しい行動をとったことに満足したのであろう。

1995 年 5 月 27 日（土）

居候先の娘キリが玄関先で雑草取りをしていたらモカという少女が通りかかって話しかけてきた。彼女は障害者で、“少女”に見えるが 20 代後半だ。キリが私を呼ぶ。モカが、私が *palagi* かどうか訊きたがっているという。キリはそうだ、と答えた。“*palagi*”は解説を要する。元来、サモア語から取り入れた言葉で一般的にはヨーロッパ人を指すといわれている。確かに彼らにとってヨーロッパ人は *palagi* である。しかし *palagi* とヨーロッパ人は同義語ではない。島のあちこちでしばしば親が子ども達に私を指して *palagi* と言っている（例えば「*palagi* に失礼なことをしてはいけない」など）。とすると *palagi* は白人/ヨーロッパ人を意味するのではなく、外来者を意味すると考えられる。しかし外来者/外部者を指すニウエ語には *nomaea* がある。こちらは主として他部族、他村、他島出身者を指す。それに対して *palagi* は全く異なった文化圏からやってきた外国人を指す。過去においてそのような外国人といえばヨーローッパ人のみであったから、*palagi*＝ヨーロッパ人とされたのだろう。しかし近年はアジアからの外国人にも出会うようになり、*palagi* の範疇が拡がったのだと考えられる。

モカは母方祖母の養女になっている。彼女は色々な人の家に入り込んで、日がな一日を過ごしている（私も全く思いもよらない人の家の窓から彼女に声を掛けられたことがある）。時には祖母に言われて他家にタロイモをもらいに行くというお使いもする。大体はニウエ語で意思疎通ができるようだし、他人に対して害になるような行動はしないが、細かな行動規範を学ぶには至っていない。悪行は全くしないが、大人だったらその状況ではしないだろうと思うようなことや、大人だったら恥ずかしいと思うような目立つことをする。大人だったら放置しておくことに手を出すとか、他人にくっついてはおかしいというような状況でくっついているとか、笑うべきではない時に笑うとかする。この程度の障害であれば基本的に生きてゆくことに障害はなく、むしろ社会的な規範を学べないため若干の困難を抱えているにすぎない。島

コマーシャル・センター

の人々は特別扱いをせず､彼女のことを理解した上でごく普通に接している。

アロフィのコマーシャル・センターでうろうろしているのをよく見かける障害者の男がいる。チリチリ巻き毛の頭頂部を残して剃り上げている今流行のヘアスタイルで決めている。私は初めごく普通の若者だと思っていた。Snack & Bar でキリとお茶を飲んでいる時、彼が我々と同じテーブルについた。キリが話しかけるとまともに受け答えする。しかし絶対に視線を合わせない。キリは普通の人に話す調子で話しかける。彼は受け答えはするが視線を逸らす。キリは彼の視線の先に移動する。すると彼は逆の方に顔を向ける。これを繰り返していた。キリもかなり執拗にするものだ。

アバセリ村の障害者はよく教会で見かける子だ。初め私は少年だと思っていた。しかしよく見るとスカートをはいている。顔立ちが良く、色白で鼻筋が通っている。しかし意味もなく笑っているのだ。いつも笑い顔。背骨に障害があり、スムーズに歩けない。しかし母親は、この子が献金を出しに祭壇へ歩いてゆく時に手助けもせず、気にも留めない。また人々もジロジロ見ることはない。子ども達すら当たり前に接している。

この社会では障害者は過度に大事にされることも、特別に排除されることもない。隣に来て坐れば普通に相手をし、話しかけてくれれば普通に応待し、遊びに来れば仲間に入れてあげる。腫れものに触るような扱いもせず、排斥的でもない、という印象を受けた。

1995 年 5 月 29 日（月）

朝、アロフィのレンタカー店の受付をしているエニケがハクプ村に用事が

あって来たので、この日、私が車を借りることになっている時間を12時から10時に変更してほしいとマネージャーのタガロアに言ってほしいと頼んだ。“OK!”とニコニコ顔で二つ返事をしたエニケ。しかしタガロアには全く伝わっていなかった。タガロアが午後、車を運転して村にやって来た時にそのことを言っても、当然という顔をしている。伝言をしなかったエニケを非難するようなことは全く言わない。

他人に物事を頼まれると、それができるかどうか、自分にする気があるかどうかを考えずにひとまず“OK”と言う。できればするし、できなければしない。面倒ならしない。そのことで非難されることはない。「××して！」「OK」これで物事は完了だ。他人に頼んで受け容れられる快感、これで十分なのだ。

家系図関係の質問の為に夕方、6時半にヘトアの家に行く。彼の妻はフィジー人でありポリネシア系のニウエ人とは面ざしが違う。インタビューの後、夕食をご馳走になった。白米ご飯の砂糖がけ、インスタント・ラーメン（湯で戻さずそのままをスナック風にして）、ビスケット、バター、ジャム、紅茶が出された。オジの一人が外国で殺人を犯したことまで話してくれた。

9時にヘトアの家を辞して外へ出ると、暗黒の世界だった。晴れていれば満天の星の下、月明りが足元を照らしてくれるが、この日は曇天だった。前方に集落を貫通する曲がりくねった道があるはずだ。道には弱々しい街灯がついているのだがすぐそばまで行かないとその光は見えない。遠くからだと無いも同然だ。足元も全く見えない。これほどの暗闇を今までに経験したことがあっただろうか。漆黒の闇。一切の音を遮断する異次元の世界。しばらくしてチラと見えた遠くの家の灯を頼りに見当を付けて道のある方向にひたすら走った。その距離は異常に長く感じられた。　　(4) 了